

■ 巻頭言

研究者の倫理

神奈川大学大学院経営学研究科

委員長 照 屋 行 雄

Yukio Teruya

今年度の院生諸君の研究成果を取りまとめた研究論文集として、『研究年報』第11号が発行されました。研究論文1件と修士論文要旨8件から構成されています。今回も研究論文の掲載が1件にとどまり、また、博士論文要旨の掲載がなかったことで、本誌のボリュームは既刊のものより少なくなっていますが、掲載論文のテーマは多彩で、その内容も真摯な研究成果となっています。

さて、昨今、研究論文の剽窃、実験結果の捏造、研究資金の不正使用など研究者の研究不正や不祥事が国内外で多発しています。このような状況の中で、研究者に対する社会の批判がいよいよ厳しくなるとともに、研究者倫理の確立がますます強く求められるようになっていきます。そこで、専門研究を職業とする者あるいは専門研究を志す者が遵守すべき倫理について、改めて考えたいと思います。

今日の社会にあっては、何人も人種・性別・宗教等に関係なく、真理を探究する権利が与えられ、かつ、学問研究の自由が保障されていることは周知の事実に属します。あらゆる分野における真理の探求なくして人類の進歩は絶望的であり、人間の幸福は悲観的とならざるを得ません。真理探究の権利は本源的なものといえます。そして、その権利が行使される制度的保障が学問研究の自由ということになります。

真理探究の権利と学問研究の自由が保障された中で、我々が専門研究に取り組む基本的姿勢を3点ほど指摘しておきたいと思います。なお、ここでは、研究者が遵守しなければならない倫理について考察しているのであって、研究者が準拠しなければならないコンプライアンス（法令順守）の問題を取り上げているわけではないということです。法規制に抵触する行為は明らかに違法行為であり、倫理以前の問題だからです。

第1には、研究における知的正直を徹底することです。自ら設定した研究テーマについて、論文の構成や論述の展開、調査結果の分析や参考文献の研究など論文の完成に至る全プロセスで、一貫して謙虚で真摯な態度を堅持して取り組むことが求められます。あるいは研究が及ばず不明点が残ったとしても、論文作成の過程で知的不正直が介在したり、思考プロセスに嘘があってはいけないということです。

第2には、学問研究における独立性を確保することです。学問研究の自由が制度的に保障されているといっても、研究遂行や論文作成の過程で種々の制約が発生するのが常です。研究における独立性とは、研究活動における身分的独立性、研究遂行における経済的独立性、そして、研究姿勢における精神的独立性から構成されます。学問

的良心として尊重されるのが精神的独立性であることは言うまでもありません。

第3には、研究者としての研究の自立を達成することです。研究の設計において自主性を堅持し、研究の遂行において自立性を確立し、そして、研究の成果において自尊性を確保するという営為が、研究者としての研究の自立を保障することになります。研究の自立を達成することは、研究の独自性（オリジナリティー）と独創性（クリエイティビティー）を確保する必須の要件といえます。

本経営学研究科に所属する我々教育研究スタッフはもとより、専門研究の緒についたばかりの院生諸君にあっても、研究行為における法令順守はもとより、研究者としての高度な倫理を遵守し、社会の期待に応えるべく研究に精励することが求められています。最後に、院生諸君の研究の一層の発展を祈念するとともに、その研究成果が本誌への掲載を通じて社会に広く公表され、学問の発展に貢献することを願っています。